The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コラム文体論 : Intertextuality と Dialogism の様相
Author(s)	笹川, 恵美子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 65-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69962
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

コラム文体論—Intertextuality と Dialogism の様相

笹川　恵美子

1. はじめに

本研究は『英文対照朝日新聞『天声人語』Vox Populi, Vox Dei』に収録された 2 編のコラムを分析の材料に、テクスト内に鮮明に観察できる Intertextuality（間テクスト性）、及び Dialogism（対話の相互作用）の様相を考察するものである。

コラムに取り上げられるテーマは政治・社会問題、科学・文化・芸術・自然など多岐に亘るが、本来新聞という媒体に掲載されるコラムでもあり、テーマの多くは受容者の既有の知識・情報に基づいたものが選択されている。また、600 字余りの短いコラムには多様な Allusion（引喩[1]）、時間・空間を超えた様々な古典や文学作品の引用が駆使される。テクスト受容者と共有可能なテーマ選択の場を共時的横軸とし、時間・空間を隔てた古人との対話、引用の世界を通時的縦軸としてコラムのテクストは構成されている。

コラムテクストに織り込まれた Allusion や、俳句や詩歌など様々な古典や文学作品の引用を間テクストの観点から展望することによって、テクスト上を交錯する時空を超えた多様な対話の相互作用が観察可能となる。これらの相互作用は、コラムのテーマや、文体・文章構成に大きく作用するばかりか、コラムの読解可能性（readability）に寄与し、日本語コラムの受容可能性を担保するものであると考えられる。

これまで日・英語間の対照修辞学の観点では、両言語間には文章構成法に明確な相違が存在すると指摘されてきた。特に『天声人語』などのコラムの構成や文体は、執筆者の曖昧で緩やかな主張態度や、余韻を残した収斂性などが、主張の判断をテクスト受容者に委ねるものと捉えられ、殊に英語話者の低い評価に繋がった。

Intertextuality や Dialogism に注目したテクストの考察は、これまで日本語コラムに与えられてきた低い評価に修正を加えるのみならず、テクスト構成の分析可能性を開拓し、テクスト受容者にとっての更なる読解可能性を模索するものである。

2. 先行研究と本研究の理論的枠組み

ロバート・カプラン（1966）の研究により創始された Contrastive Rhetoric（対照修辞学）の分野は、以後、様々な言語間の文章構成法の相違を積極的に研究する場を提供した(Kaplan[2], 1966; Connor, 1996)。その一環としてジョン・ハインズ（1982）の研究により鮮明となった日・英語間に横たわる文章構成法の相違は、以後、対照修辞学の分野では長期に亘る定着した見解となっている（Kaplan, 1966; Hinds, 1982; Connor, 1996; 舘岡,1998）。ハインズが調査に採用した文献は朝日新聞掲載の『天声人語』であった。任意に抽出した数点のコラム（日本語・英語翻訳版）の文章構成について、日本語及び英語話者に評価[3]を依頼したもので、日本語話者が与えた総じて高い評価に対し、英語話者の多くが低い評価を与えたという。

調査の結果を踏まえ、ハインズはコラムに運用される「起承転結」などの文章構成法は、執筆者の曖昧な主張態度、「結」の部分の緩やかな収束性など、英語のライティングには見られないレトリックであるとし、日・英語間の執筆姿勢の違いとその特徴を、日本語に関しては“Reader Responsibility” そして、英語に関しては“Writer Responsibility”という言葉で表現した。文章構成法に重きを置いたコラムの分析では、「起承転結」のようなレトリックに則って書かれたテクス

1　本研究では「allusion（引喩）」を「間接引用」、すなわち執筆内容に言及するために、読者との共有認識が可能と考えられる古典や文学作品、詩歌などの文言を引用するレトリックを指す。引用符で囲われておらず、程度の差はあっても本文に溶け込んでいるものを指す。

2　ロバート・カプラン(1966) は、*Cultural thought patterns in inter-cultural education* の中で、Expository Writing（説明文・解説文）の文章構成（Paragraph Construction）について、言語間に存在する相違を 5 つのパターンに分類し図示した。日本語など東洋の言語は渦巻き型構成に分類されている。

3　ハインズが依頼したコラムの文章構成評価は[Unity, Focus, Coherence] の 3 点に対して 5 段階で評価するものであった。Unity には “Logical development and flow of thought,” Focus には “Stay on the topic without wandering,” Coherence には “sticking together of major parts of writing, use of transitions” と定義している。

トは、英語話者のスムーズな読解を担保できず、内容理解に多大な困難を伴うものであると結論している。

20 世紀後半に提出された日・英語間の対照修辞学のこのような見解は、Donahue (1998) や McCagg (1996)によって、批判的異文化間コミュニケーションの立場から、また英語対他言語という英語優位論批判の立場から Kubota (1997)によって異議が提出されている。

執筆者の主張や見解を正確に担保するためには、結論に至る論理の流れや整合性、首尾一貫性は重要な要素であるが、それ以外の側面も考慮すべきであろう。新聞コラムなどのテクストは、受容者側の既有知識や共有された情報に読解可能性を依拠するところが大きく、時代を越えて言い習わされた引喩や、時間・空間を越えて生命力を発揮する古典など、文芸作品の引用が数多く観察される。特に『天声人語』などの新聞コラムでは、引喩や文学作品の引用がないテクストは皆無に近いと言っても過言ではない。では、テクストに観察できるこれらの間テクストはどのような役割を果たしているのであろうか。

短詩形式で詠まれる俳諧表現において、間テクストは見逃すことのできない視点である。芭蕉や蕪村の研究において尾形仂は、句作者が集い詩心を共有する共時的空間である「座」と、そこで取り交わされる西行や宗祇、杜甫や蘇東坡ら時空を遡った古人との詩的交流が、彼らの活動を芸術へ結実させると説く。共時的共同体としての横軸と、通時的共同体としての縦軸が共鳴し合い交響を奏でることによって芸術の世界が形成されると言うのだ (1973)。芭蕉の詩人としての人となりとその芸術を、その後の蕪村が継承し、それが夏目漱石の『行人』へと引き継がれる軌跡を尾形は語っている。

また、テクストの「引用」について、ミハイル・バフチンは、ヘレニズムの時代から中世への歴史的経過の中で「ある種の作品はモザイクのように他者のテクストから構成されていた」と概観し、「どのようなテクストも様々な引用のモザイクとして形成され、テクストはすべて、別のテクストの吸収と変形に他ならない」と述べている（伊東,1996; 桑野, 1987)。高い権威を持つ宗教的な言葉の引用は、一方の極では敬虔で活性を欠いた神聖な言葉として援用され、その対極では最も両義的にパロディ的に振りとして用いられると述べている。「他者の言語、他者の文体、他者の言葉」を引用するというバフチンの発見を、ジュリア・クリステヴァはバフチンの功績とし、「Intertextuality (間テクスト性)」という言葉を定着させている（桑野, 1987; Allen, 2002)。そして、バフチンはこのような引用に対する見解を“Dialogism”という思想の中で展開させている。

Dialogism（対話の相互作用）は「すべての発話は単独では存在しない」というバフチンの文芸理論の根幹をなすものである。すべての言葉・発話・陳述を「対話」であると捉え、「対話は複数の主体そのものの単なる存在ではなく、十全な価値を持った了解が不可欠である」（桑野,1987）とし、情報の相互共有を図る空間の不可欠性を強調した。バフチンはまた、内的対話として、相互に作用を及ぼし合う対話が同一人物の中で繰り広げられるモノローグ的対話にも注目しているが、これらは尾形の論ずる共時的世界と通時的世界での交響が個々の意識の中で交わされるものと捉えることができよう。両者の見解には合い通ずるものがあると言えよう。

バフチンがテクスト分析に積極的に関わったのはフランシス・ラブレーの作品や、ドストエフスキーの長編小説であるが、本研究の考察対象とするコラムテクストのような極めて短い文章にもバフチンや尾形の理論を援用することは可能であろう。コラムはテクスト執筆者、受容者のみならず、テーマの中心人物、引用の主人公など、様々なテクスト参加者が既有知識や情報を共有し合い、間テクストで織りあげられたテクスト空間を、時空を越えて相互に対話を行いながら内的対話を繰り広げる実践の場と考えられるからである。

コラムテクストを間テクスト、対話の相互作用の観点から分析することは、テクスト読解の可能性を開拓するものである。それはハインズが指摘したような執筆者の一方的な志向や意見の主張ではなく、執筆者の立場である Writer Responsibility をコラム受容者が Reader Responsibility の立場で受け取り共有することを意味するもののはずである。執筆者とテクスト受容者がテーマの主人公、間テクストの登場人物と共に交わす対話の相互作用の観察は新たな読解可能性を示唆するものである。そうすることによってテクスト上を交錯する多層的かつ重層的な文体構成を展観することが可能となる。

3. 『天声人語』について

朝日新聞第一面に設けられた「天声人語」欄に掲載される日々のコラムには見出しやタイトルはない。コラムが年に 4 回、『英文対照朝日新聞『天声人語』Vox Populi, Vox Dei』として編集され原書房から出版される際、日本語・英語翻訳版の双方に新たに見出しが付される。また、新聞掲載のコラムには執筆者名は付されないが、出版物では執筆者や編集者を確認することは可能である。

4. 分析対象コラムテクストの概観

4.1 「銀杏の落葉の神秘」2012 年 11 月 3 日付けコラムの概要

6 段落構成のコラムは、早起きの執筆者が、昨夜眺めた月や金星の美しさに想いを馳せつつ、冴えわたる冷気の中で宮沢賢治の『いてふの実』[4]を読み返す風景を描いている。読み進むうち、作品の一節、ぎんなんの実が黄金の雨さながらに一斉に落下するシーンが、執筆者を 1 年前に執筆したコラムの世界へフラッシュバックさせる。昨年度、2011 年 11 月 27 日付けのコラムは「葉守りの神の怒り」と題されたもので、三浦哲郎[5]の『落葉しぐれの章』が引用されている。三浦の描く古い銀杏の大木の豪壮な落葉シーンに対して、執筆者は「文学的誇張であろう」と評するのだが、その評価にコラム受容者から多くの反応が寄せられ、その一部が読者の便りとして 1 年後のこのコラム「銀杏の落葉の神秘」で引用かつ紹介される。作品の評価を通した読者との交流という間テクストを観察できるものである。

なお、このコラムテクストでは引喩としての「春暁」、『いてふの実』、『落葉しぐれの章』、読者の「便り」の引用が観察できる。

4.2 「葉守りの神の怒り」2011 年 11 月 27 日付けコラムの概要

コラムは上述のものと同様 6 段落構成である。第 1 段落冒頭で、俳句にも非凡な才能を発揮した芥川龍之介の高浜虚子に宛てた手紙が発見されたことが紹介される。これは、次段落で引用される俳句の導入となっている。第 2 段落で、落葉の季節になればいつも執筆者の脳裏に蘇るという芥川龍之介尋常小学校 4 年時の句作、＜落ち葉焚いて葉守りの神を見し夜かな＞が引用される。第 3 段落で、執筆者が居住する近隣の公園の壮大な銀杏の黄葉に話が及び、次の第 4，5 段落で三浦哲郎著『落葉しぐれの章』の銀杏の落葉シーンの一節が引用される。三浦の『落ち葉しぐれの章』の引用はこのコラムが最初と思われるが、上述の一年後の引用との間に若干の違いが観察できる。

最後の第 6 段落では、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災に言及し、多くの病葉を増産した原発事故を人災として告発している。

当コラムでは、「梅檀は双葉より芳し」が引喩として用いられ、芥川の俳句、三浦の『落葉しぐれの章』が間テクストとして引用されている。

5. コラムテクストの分析と考察

最初に 2012 年度のコラム「銀杏の落葉の神秘」に観察できる間テクストを考察し、次に執筆者がフラッシュバックする対象である 2011 年度に書かれたコラム、「葉守りの神の怒り」の間テクストを考察する。両者を繋げる間テクストとしての「読者の便り」は両コラムの後に行うものとする。

5.1 「銀杏の落葉の神秘」 2012 年

5.1.1 孟浩然[6] 「春暁」

テクスト第 1 段落は「早起きの身に、よく晴れた晩秋の夜明けは気分がいい」という書き出し

---

[4] 短編の童話「いてふの実」(1979 年初版)

[5] 三浦哲郎（1931-2010）青森県八戸市に生まれる。故郷、南部地方の素朴な風土やつましく暮らす人々を題材にした作品が多い。コラムの執筆者が引用したのは、大岡信、田中澄江、塚谷裕一監修の「花の命随筆集十一月の花」(1999) 所収の三浦の随筆「落葉しぐれの章」であろう。

[6] 孟浩然（689-740）盛唐の詩人。自然は詩人として山水田園の情景を詠じた詩を作詩する。杜甫、李白、王維と共に「盛唐四大家」とも称される。

で始まり、「暁を覚えぬ春とは違って、眠気はすっきりと心と体から抜けていく」という第 3 文に孟浩然（689~740）の五言絶句「春暁」の起句が捩りとして援用されている。

春眠不覚曉
処処聞啼鳥
夜来風雨声
花落知多少

五言絶句の「春暁」は日本では広く知られた漢詩である。「春の朝は心地よくて、いつ朝になったのかさえ気づかないほど眠いものだ」という意味合いは、テクスト受容者には馴染みの深いものであり、起句のみで用いられることも多い。寝床の中と思われる詩人の耳に伝わる鳥の鳴き声、そして昨夜来の雨風への言及。結句は「花落知多少」とあり、「あの風雨でいったいどのくらいの花が散ってしまったのだろう」と散ってしまったであろう花へ思いを馳せている。

コラムでは晩秋の早朝の清澄な冷気を描写するための対照表現として「春暁」の起句のみが援用されているが、転句の「夜来風雨声」は、コラム文言の「よく晴れた晩秋の夜明け」の対照表現と見て取ることも可能である。また、結句の「花落知多少」についても、第 2 段落以降の銀杏の落葉やぎんなんの落下に繋がるものが想定される。春の花と秋の紅葉に、自然の力による落花や落葉の共通性を見出すことは可能であろう。また、コラムの執筆者は寝床を離れ、凛とした空気の中で読書をしているが、漢詩の中の詩人は夜具に身を横たえて微睡んでいる情景が想像できる。これも、この漢詩を共有するコラム受容者にとっては面白い対比の表現となろう。

5.1.2 「銀杏の落葉の神秘」　宮沢賢治『いてふの実』

テクスト第 2 段落は「そんな澄み切った明け方、丘の上の一本の銀杏から、ぎんなんが一斉に飛び降りる童話を宮沢賢治は書いた」という書き出しで、「木をお母さん、黄金色の実をあまたの子に擬し、落下を『旅立ち』と書く筆はやさしい」と続く。執筆者の視点は、間テクストにあるように、銀杏の木から一斉に落下するぎんなんの子供たちの旅立ちにあると思われるが、木である「おっかさん」の銀杏の落葉については童話本文に次のような描写がある。

> さうです。この銀杏の木はお母さんでした。今年は千人の黄金色の子供が生まれたのです。そして今日こそ子供らがみんな一緒に旅に発つのです。お母さんはそれをあんまり悲しんで扇形の黄金の髪の毛を昨日までにみんな落としてしまひました。

『いてふの実』は銀杏がすべて葉を落としてしまった翌日の早朝、ぎんなんの子供達が旅立ちを目前に控え、お互いを労わり合いながら、今までの非礼を詫びたり、旅立ちへの期待や死ぬかもしれないという不安、悲壮な決心などを語り合ったりする子供たち同士の会話が中心の作品である。おっ母さんとの別れはどんなに辛くても、木に留まることは許されず、子供たちは旅立たねばならないことを心得ている。やがて第一番の冷たい北風が吹き、金色のまばゆい光が銀杏の木に射しかかった時、子供たちは一斉に旅立っていく。お日様は悲しみにくれる銀杏のおっ母さんには温かい慰めを、旅立った子供たちには限りなく大きな祝福を投げかけるという物語で、作品は次のような文章で終わっている。

> 突然光の束が黄金の矢のやうに一度に飛んできました。「さよなら、おっかさん。」「さよなら、おっかさん。」子共らはみんな一度に、雨のやうに枝から飛び下りました。
> お日様は燃える宝石のやうに東の空にかかり、あらんかぎりのかゞやきを悲しむ母親の木と旅に出た子供らとに投げておやりなさいました。

コラムテクスト第 3 段落には、上記の一部がそのまま引用され、「子らは靴をはき、外套をはおって旅の支度をする。冷たい北風がゴーッと吹くと『さよなら、おっかさん』と口々にいって枝から飛び降りる」とあり、コラムの視点はぎんなんの旅立ちにあって、おっかさんの銀杏の木には置かれていない。

しかし、『いてふの実』の世界を共有できる受容者であれば、おっかさんの銀杏の木はすでに落葉してしまっていること、その落葉は彼女の悲しみのためであったこと、お日様が限りない慈愛をそそぐことなどの情報を交換することが可能である。そのような読み方をすることによって次に引用される『落ち葉しぐれの章』の引用が生きてくる。

また、コラムテクストには「すさまじい」「解脱」「憑かれたように」「神秘」「感謝」などの表現が散見できる。執筆者の意図的なものかどうかは分明ではないが、宮沢賢治の作品に親しんだ者であれば、彼が仏教に深く帰依した作家であったことなどとの関連性も指摘できるであろう。また、三浦の随筆のテーマになる大銀杏は故郷の寺の境内のものである。

5.1.3　「銀杏の落葉の神秘」　三浦哲郎『落葉しぐれの章』

第 3 段落の文末の一文は、「黄金の雨が降るような描写を読み直すうち、ふと読者から頂いた便りを思い出した」とあり、コラム間の間テクスト性を指摘した上で三浦の『落ち葉しぐれの章』を導入している。ぎんなんの落下との関連性からであろう、第 4 段落の文頭は「去年の今ごろ、作家の故三浦哲郎さんの文を拝借した」で始まり、読者から便りが届いたことに言及し、次に三浦作品への引用に移る。間テクストは「郷里の寺の銀杏が、『毎年十一月のよく晴れた、冷え込みのきびしい朝に、わずか三十分ほどで一枚残らず落葉してしまう』」のみである。

三浦の『落葉しぐれの章』で中心的に描かれるのは、三浦の母が好んだ、故郷の寺の境内にある一本の大銀杏の落葉の荘厳さである。ぎんなんの落下を描いたものではないが、葉がすべて落葉した後のぎんなんの姿は作品の中でも描かれている。コラム引用の部分は作品の以下の場面から取られたものであろう。

> 郷里の寺の境内に、樹齢百年はとっくに越えたと思われる背の高い銀杏の木がある。おふくろは生前この木が好きで、寝込む前には、よく秋の黄葉の美しさや、いさぎよい落葉の光景を話題にしていた。
>
> 裏山から昇る朝日が、庫裏の屋根越しに銀杏の木のてっぺんに当ると、まずそこの一枚が、ひらと枝を離れて舞い落ちる。それをきっかけに、葉は陽を浴びたところから順に落ち始める。まるで黄金色の分厚いマントを肩からゆるゆると足元へ脱ぎ落とすように。実際さわさわと衣ずれに似た音を立てながら。
>
> その間、わずかに三十分。丸裸になった枝々には、鈴なりのぎんなんだけがいかにも寒そうに揺れている。
>
> おふくろは、黄葉よりもむしろ落葉の方に心を惹かれているような話振りであった。

作品自体は三浦が母の葬儀のために帰郷した時の印象を随筆風に記したものである。「死に際は銀杏の黄葉の、潔い落葉のようでありたい」と言っていた母の言葉を思い出しながら、母の遺骨を胸に抱き、この銀杏の木の下を歩いていく。三浦の帰郷はこの大木の落葉の時節ではなかったが、彼にとって銀杏の木とその落葉は、母とその死、母との別離に繋がるものであったはずである。

コラムの引用部分には三浦の母の死や、死んだ母が銀杏の落葉を愛したことなどに関する描写は一切なく、書かれてあるのは、銀杏の落葉の具体的な時期や時間に関する描写のみである。また、テクストを詳細に観察すれば、その引用も原文からの直接引用ではなく執筆者によって簡潔にまとめられ、その落葉の仕方に特に焦点が当てられているのがわかる。その落葉描写に「文学誇張であろう」と記したことが 1 年前のテクストに執筆者をフラッシュバックさせることになる。

5.2　「葉守りの神の怒り」2011 年

5.2.1　＜落ち葉焚いて葉守りの神を見し夜かな＞

芥川龍之介の尋常小学校 4 年時の作品とされ、落葉の季節になるといつも執筆者の脳裏に思い起こされる俳句あるという。

大正 14 年（1925 年）6 月発行『俳壇文芸』所収の「わが俳諧修行」に「小学時代―尋常四年のとき初めて十七文字を並べて見る。＜落葉焚いて葉守りの神を見し夜かな＞。鏡花の小説など読みいたれば、その浪漫主義を学びたるなるべし」とある。

「葉守りの神」とは樹木を守る神で、柏の木に宿ると言われている。柏の葉は枯れても春の新芽が萌え出すころまで落下せずに木に残るものがあり、これが呼称の所以とも伝えられているらしい（日本国語大辞典より）。

平安時代の古典文学にも「葉守りの神」の描写を観察することができる。例えば、『枕草子』三十八段には「柏木、いとをかし。葉守の神のいますらむもかしこし。」と描写がある。

一方、『源氏物語』―「柏木」には「葉守りの神」に因んだ以下のような描写が観察できる。夕霧（柏木の親友で光源氏の長男）が、病死した柏木の妻である落ち葉の宮と歌の贈答を行う。その歌の中に以下のような表現がなされている。

夕霧　　「ことならばならしの枝にならさなむ葉守の神のゆるしありきと」
落葉の宮「かしはぎにはもりの神はまさずとも人にならすべき宿のこずえか」
日本古典選『源氏物語』―柏木より

光源氏の正室となった女三宮に道ならぬ恋をした柏木は重い病に倒れてしまう。一方、源氏の正妻である女三宮は、禁断の恋に対する自責の念から父の朱雀院（先帝）に出家を懇願する。女三宮の出家が朱雀院によって受理されたことを病床で聞き知った柏木は、深く苦しみ、とうとう病死してしまう。柏木の死後、親しい友人であった夕霧は、今は寡婦となった落葉の宮の傷心を癒すべく彼女を訪い慰める。

夕霧は「同じ親しくするならもっと身近な連理の枝として親しませて頂きたい。葉守の神（柏木）の遺言があったものとして」と言って落葉の宮に言い寄るのであるが、落葉の宮は「柏木には葉守の神が宿っていなくとも、人を近づける梢ではありません。私にはもう夫はいませんが、むやみに人と親しむことなどとてもできません」と応対し、夕霧の無作法ともいえる態度を責めているのである。

また「柏木」の段には「神、仏をもかこたむ方なきは、これ皆さるべきにこそはあらめ」とあり、コラム第 6 段落の冒頭の一文、「だが、原発事故の今年、多くの落ち葉は不遇をかこつ」とあり、「境遇を嘆く、恨む」という意味合いで、コラムにも「かこつ」が引用されているとも考えられる。

このコラムの第 1 から第 5 段落には、同年度 3 月に発生した東日本大震災や原発事故に関する描写は皆無である。第 6 段落で突如執筆者の告発として、多くの病葉を量産した原発への非難が語られる。『源氏物語』でも描写されるように、「葉守りの神」には、生命を守るというイメージと表裏一体の死のイメージが付きまとうのであろうか。

5.2.2　栴檀は双葉より芳し

白檀（栴檀は白檀の別称）は発芽時から香気を放つように、大成する人物は幼少時から人並み外れた優秀さをみせる、という意味で使用されるが、日本国語大辞典（小学館）では、『平家物語』[7]、俳書『毛吹草』[8]、二葉亭四迷『浮雲』[9]に典故が確認でき、引喩として定着していることが観察できる。

『平家物語』一、殿下乗合
「凡そは資盛奇怪也。栴檀は二葉よりかうばしとこそみえたれ。既に十二三にならんずる者の、今は礼儀を存知してこそ振る舞うべきに、か様に尾籠を現じて、入道の悪名をたつ。不幸の至り、汝ひとりにありけり」　（『平家物語』上 p. 144）

『毛吹草』（けふきぐさ）二
「せんたんは二ばよりかうばし。しゃは一すんより大かいをしる」

『浮雲』二－八

7　原本は承久（1219~1222）～仁治（1240~1243）の間の完成と言われる。
8　松江重頼（1645）により編集された俳諧書
9　二葉亭四迷著　1887～1898 年(明治 20~22 年)発表

「栴檀は二葉から馨（カウ）ばしく、蛇は一寸にして人を呑む気がある。文三の眼より見る時はお勢は所謂女豪の萌芽（めばえ）だ」

「大成する人物は幼少時より類まれな美質を表すものだ」という意味合いで用いられる引喩は、上記出典でも「蛇は一寸にして人を呑む気がある」など他の例が幾つか数えられるが、銀杏の落葉やぎんなんの落下、柏の木に宿ると言われる「葉守りの神」などを題材としたコラムには、同様に樹木を扱うものとして「栴檀は双葉より芳し」はより内容に適合したなものであったと思われる。

5.2.3　三浦哲郎『落葉しぐれの章』

第 4 と第 5 段落で三浦哲郎著『落葉しぐれの章』が引用されるが、2012 年度のものとは違い 2011 年度のコラムでは、ひたすら銀杏の落葉時の潔さ、荘厳さに焦点が当てられている。執筆者は三浦の表現を「文学的誇張」としながらも、憑かれたように散りしきる銀杏の落葉に凋落の悲哀はなく、その勇壮さは集団演武のようだと表現している。

それだけに、最後の第 6 段落で突然導入される同年に発生した東日本大震災と原発事故の悲惨な現状がコラム受容者に迫ってくる。

5.3　「銀杏の落葉の神秘」　読者の便り

コラム第 5 段落で、「ある人は『すさまじい光景だった』と表し、ある人は『解脱するように』と例えていた」とあり、読者の便りの一部を引用している。これらは上記『落葉しぐれの章』の銀杏の落葉の描写を、「文学的誇張であろう」と記した執筆者に対する読者の反論である。

「すさまじい光景だった」「解脱するように」など宗教的な表現を引用し、敬虔な仏教徒であった宮沢賢治にも繋がる便りが引用されている。

5.4　まとめ

2 編のコラムに描かれるのは共に銀杏などの樹木の荘厳ともいえる落葉であるが、執筆のテーマには明らかな相違が存在する。

2012 年度のコラムでは、執筆者がコラム受容者と共有できる共時的横軸として、深まりゆく秋の、冬への確実な移行という季節の変化が挙げられる。また、引用された間テクストを通して見られる「母と子の別れ」をテーマとした離別は、季節の移行と重なるところがあるかもしれない。しかし、最後の段落は「豪壮な黄葉は今日はどの辺りか。夜はぎんなん坊やをつまみに、深まる秋に浸るのもよし。おっかさんの銀杏の木に、感謝を忘れず。」と結ばれており、執筆者の明確な主張は看取できず、コラムは緩やかに収束している。

他方、その前年度に書かれたコラムでは、共時的横軸として共有できる季節事象は 2012 年と同様である。しかし、2011 年度のものには、執筆者の強い告発が最後の段落に鮮明に表現されている。間テクストとして引用されている芥川の俳句や三浦の随筆は、表層的には晩秋に落葉する樹木の神秘さ、銀杏の落葉の荘厳さをコラム受容者と共有するものである。が、最後の執筆者の強い告発は、却って「葉守りの神」や『落葉しぐれの章』に非明示的に語られる「死」をイメージするものとも受け取れる。『源氏物語』で語られる柏木は、葉守りの神に見守られることなく短命であり、また、芥川も短命であった。『落葉しぐれの章』でも、三浦の母の死が語られる。

2 つのコラムに共通するポイントとして、秋の深まりや樹木の落葉は、多々春の風物詩との対比表現で語られることがあるということだ。2012 年のものには「春暁」が引喩として用いられ、2011 年のものには「（銀杏は）小春の陽を受けて満開の桜のように華やいでいる。花吹雪ならぬ黄金の雨を降らすときは遠くない。銀杏は、春の桜を思わせる潔さで散っていく。」というように、くどいほど春のイメージが強調されている。「死」と「復活」をあたかも暗示するかのようである。

最後に、2 つのコラムを繋ぐものとして「読者の便り」という間テクストが存在する。これはどのような役割を演じているのであろうか。

2011 年 3 月、東日本大震災が発生し、原発事故が起きた。同年 11 月に書かれたコラムでは、導入などなしで、最後の段落で人災としての原発事故を告発することが却って強いメッセージ性を持つものと考えられる。しかし、1 年後のコラムでは原発のことは語られるわけでもなく、秋の

風物詩を楽しむ方向に流れている。2 つのコラムをコラム受容者が「読者の便り」で結び付ける時、これは読み過ぎと言えなくもないが、過去の悲惨な出来事をできるだけ忘れようとする人間の姿が垣間見えるとも受け取れる。

6. 結論

Intertextuality（間テクスト）及び Dialogism（対話の相互作用）の観点からコラムを分析することによって、コラムを構成する重層的な文体構造を観察することが可能である。それは明示されたテーマの中に重層的に交錯する非明示的な交響を聞くことに他ならない。執筆者とコラム受容者の双方が共時的空間を共有し、間テクストを通して対話の相互作用を図ることによって新たなテクストの読解可能性を示唆することが可能である。

資料

1. 「銀杏の落葉の神秘」　2012 年 11 月 3 日

▼早起きの身に、よく晴れた晩秋の夜明けは気分がいい。きのうは藍色の天空に居待ち月が浮かび、明けの明星が皓々ときらめいていた。暁を覚えぬ春とは違って、眠気はすっきり心と体から抜けていく。▼そんな澄み切った明け方、丘の上の一本の銀杏から、ぎんなんが一斉に飛び降りる童話を宮沢賢治は書いた。木をお母さん、黄金色の実をあまたの子に擬し、落下を「旅立ち」と書く筆はやさしい。▼子らは靴をはき、外套をはおって旅の支度をする。冷たい北風がゴーッと吹くと、「さよなら、おっかさん」と口々に言って枝から飛び降りる――。黄金の雨が降るような描写を読み直すうち、ふと読者から頂いた便りを思い出した。▼去年の今ごろ、作家の故三浦哲郎さんの文を拝借した。郷里の寺の銀杏が、「毎年十一月のよく晴れた、冷え込みのきびしい朝に、わずか三十分ほどで一枚残らず落葉してしまう。」これを文学的誇張であろうと書いたら、そういうことは他でもあると、何人かが教えてくださった。▼ある人は「すさまじい光景だった」と表し、ある人は「解脱するかのように」と例えていた。裸になった木の下には厚み 10 センチほどの絨毯が敷かれたそうだ。風もなく、憑かれたように散る光景を思えば、樹木の神秘に粛然となる。▼立冬が近く、けさは各地で一番の冷え込みになるらしい。豪壮な黄葉は今日はどの辺りか。夜はぎんなん坊やをつまみに、深まる秋に浸るのもよし。おっかさんの銀杏の木に、感謝を忘れず。（603 文字）

2. 「葉守りの神の怒り」　2011 年 11 月 27 日（日）

▼芥川龍之介が俳人の高浜虚子に俳句の評を乞うた手紙が見つかり、兵庫県芦屋市の虚子記念文学館で展示されている。天才肌の作家は句作にも熱心で、幼年から親しんだ。小学 4 年で詠んだという一句が、枯れ葉の舞う季節になると思い起こされる。▼＜落ち葉焚いて葉守りの神を見し夜かな＞。栴檀は双葉より芳し、だろう。「葉守りの神」とは柏の木に宿るといわれる樹木の守り神。木々の「紅葉」は秋の季語だが、「落葉」はもう冬の季語になる。▼北国から雪の便りを聞きつつ、暖地は晩秋から冬の入り口へと移る。近所の公園を歩くと銀杏が豪壮な炎のようだ。小春の陽を受けて満開の桜のように華やいでいる。花吹雪ならぬ黄金の雨を降らすときは遠くない。銀杏は、春の桜を思わせる潔さで散っていく。▼青森生まれの作家、故三浦哲郎さんが郷里の寺にある銀杏のことを書いていた。「毎年十一月の、よく晴れた、霜が降りて冷え込みのきびしい或る朝に、わずか三十分ほどで一枚残らず落葉してしまう」と。▼文学的誇張はあろうが、たしかに銀杏は、風の力も借りずに憑かれたように散りしきり、樹下を金色に変えていく。その姿に凋落の悲哀はない。枝から地面までの短い旅は、集団演武さながらだ。▼だが、原発事故の今年、多くの落ち葉は不遇をかこつ。落ち葉焚きは自粛され、腐葉土作りは見送られ、子らに拾われることもない。薄幸な「病葉」を量産した人災への、葉守りの神の怒りを聞くように、落葉の季節が過ぎていく。（606 字）

References

池田拓朗　『英語文体論』東京：研究社出版　1992 年

大岡　信・田中澄江・塚谷裕一『花の名随筆　十一月の花』東京：作品社　1999 年

尾形　仂　『座の文学―連衆心と俳諧の成立』東京：講談社学術文庫　1997 年

北岡誠司『バフチン　対話とカーニヴァル　現代思想の冒険者たち 10』　東京：講談社　1998 年

グレアム・アレン(著) 森田　孟(訳)『文学・文化研究の新展開―間テクスト性』東京：研究社　2002 年

桑野　隆『バフチン―対話そして解放のお笑い』東京：岩波書店　1987 年

齋藤　晌　『漢詩大系 7「唐詩選下」』東京：集英社　1975 年

舘岡洋子『アメリカ・カナダ大学連合　日本研究センター　紀要』21　1998 年

バフチン・M.(著)　伊東一郎（訳)『小説の言葉』: 東京　平凡社　1996 年

Beaugrande, R. A. & Dressler, W. U. *Introduction to text linguistics.* Longman.　1981 年

Connor, U. *Contrastive Rhetoric: Cross-cultural aspects of second-language writing.* N.Y.: Cambridge University Press. 1996 年

Donahue, R. T. *Japanese culture and communication: Critical cultural analysis.* Lanham, Maryland: University Press of America. 1998 年

Halliday, M. A. K. & Hasan, R. *Cohesion in English*. Longman　1976 年

Hinds, J. Contrastive rhetoric: Japanese and English. *Text, 3,* 183-195. 1983 年

Kaplan, R. B. Cultural thought patterns in inter-cultural education. *Language and Learning,* 16, 1-20. 1966 年

Kubota, R. A reevaluation of the uniqueness of Japanese written discourse. *Written Communication, 14(4),* pp. 460-480. 1997 年

McCagg, P. If you can lead a horse to water, you don't have to make it drink: Some comments on reader and writer responsibilities. *Multilingua, 15*, 239-256. 1996 年

『英文対照［朝日新聞］天声人語　Vox Populi, Vox Dei Vol. 167 冬号』東京：原書房　2011 年

『英文対照［朝日新聞］天声人語　Vox Populi, Vox Dei Vol. 171.冬号』東京：原書房　2012 年